

勉強ができなかったわたしへ

小窪瑞穂 — ライター

『ぼくは勉強ができない』 山田詠美／新潮文庫／1993年



この本には、17歳の時田秀美くんという素敵なお男子が出てくる。勉強はできないけれど、女の子によくもてる。学校はなんだか居心地が悪い。彼のまわりには、魅力的で素敵な大人たちがいて、そのみんなが秀美くんをかたち作っているといってもいい。いつまでも女であり自由奔放な母、つねに恋している祖父、クールな年上の恋人桃子さん、ほかの先生とは違ってよき理解者の桜井先生。それぞれの秀美くんへかける言葉が味わい深い。こんな大人たちが17歳の時まわりにいたら、わたしも素敵に、早めに成長できていただろうと思う。それぞれキャラクターは違うのに、秀美くんをとりまく大人たちには共通点がある。みな、確固たる自分をもっているのである。自分のなかに、一本の筋がしっかり通っているのである。そして、愛らしい。

秀美くんはカッコいい。17歳にして自分がある。自分がある、とはどういうことだろう。自分なりの考えをもっている、あるいは、自分の感覚に正直である、ということではないかとわたしは思う。秀美くんをカッコよくしているのは、歳の離れた彼女とセックスをしていることでも、彼女が働くバーに出入りしていることでもない。秀美くんは、17歳にしておおよそ彼ができあがっているのである。もちろんまだ成長過程にあるだろうけど、彼はかぎりなく大人に近い、凛々しい高校生なのだ。

秀美くんのように周囲の人々やさまざまなことに対して思慮深くあれたら、どんなにいいだろう。そんなふうには成長するためには、周囲に素敵な大人たちが必要だろうが、大人だってそうあれな人もいる。だいたい、すべての大人がきちんと大人になっているとはかぎらない。そんな大人と一緒に子どもが成長しなければならないのは、恐ろしいことだ。ではもし、周囲に素敵な大人がいなかったら、いったいどうしたらいいのだろう。こんなふうには、本のなかで出会えないだろうか。大人になりゆく成長過程が、そういった運に左右されてしまうのなら、積極的に本を読んでいくしかない。本のなかには、秀美くんのまわりにいるような、笑ってしまうほど魅力的な大人たちがいる。自分なりの理論、生き方を見つける手助けをしてくれる大人たちがいる。本のなかでのそういった出会いは、本を手取る大きな喜びであり楽しみでもある。わたしがこの本をはじめ手に取ったのは、17歳よりも少しあとだった。勉強ができなかったわたしを思う、今ふりかえっても口元がほころぶ。●